

## 卷頭言

高杉良に「不撓不屈」と言う小説がある。これは税理士飯塚毅と国税局との七年に及ぶ想像を絶する対立、いわゆる飯塚事件を描いた実話に基づく小説である。これは映画化もされ、滝田栄が主人公飯塚を好演した。「不撓不屈」とはどの様な困難にもひるまず、くじけない精神を言う。私は小説を読み、映画も見た。そこで実感した事は、国家権力の恐さ、官僚の凄さだ。家族や恩師や心の師に支えられたとは言え、一人の力で立ち向かえる相手ではない。今度の西松建設にまつわる小沢秘書逮捕は政官業の上に検察まで加わっている事を改めて認識させられた。もっとも検事も官僚と同根であってみれば、何も驚く事は無いのかもしれない。そしてその政官業の情報を垂れ流すマスコミと、簡単に世論操作されてしまう国民。まだ記憶に新しい小泉郵政選挙の狂乱を忘れてしまったのか。あの時と同じ事が又起ころうとしている。それ程に政官業の癒着の構造は根強く、政権交代はどんな手を使っても阻止しなければならない彼等の最大目標なのであろう。そして北朝鮮のミサイル発射にはしゃぐ政府と自衛隊。防衛大臣浜田の原稿棒読みの談話を聴く度に、自衛隊よお前もかと思う。国家権力と結合した軍隊程恐ろしいのは無い事をもう知らない世代が増えている事が恐ろしい。私達は今、とんでも無い時代に遭遇しているのかも知れない。今まで闇の中に隠れていたものが、次から次へと表に現れ、それに異と感じられないマスコミや御用評論家学者が闊歩し国民は枯葦の如く揺れ動く。真実日本民族の未来は危うい。

(高崎)

## 太陽の舟 目次

三十一巻 五月号 (通巻一九三号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —	庄司 久恵	1
卷頭言	高崎 邦彦	1
二十五首詠	江面 伸子	2
阿部正路論 (第九十一回)	須藤 宏明	4
歌誌散見 (第六十七回)	豊泉 豪	5
作品 I	村田 一江他	6
三月批評 (作品 I)	月田 藤枝	16
(作品 II)	森田 勝昭	17
合 評 (座談会)		18
選者十首	岩橋千代子・武田 節子	20
	森本 元昭・上田やい子	21
秀歌抜芳 (二九十一号)	高崎 邦彦	22
作品 II	末次 房江他	26
文法講座 (五)	奥田 清	35
作歌の目・作歌の技法 (第五十二回)	三木 勝	36
歌帖余白 (六十五)	松岡 三夫	38
洗足池吟行会報告	庄司 久恵	39
歌会・支部報告 他		41
編集後記	山田 (紀)・山名・松岡	
題字	阿部正路	
表紙	イラスト阿部正冬	

## 日々是好日

江面伸子

山麓の線香工場に水車あり静かなる音コスモスゆれる  
勿体ない言葉くりかへし媪らは孫の贅沢口ぐちに言ふ

珍しい茸もならぶ直賣所やっぱりここは筑波山麓

雨上りの山茶花白く清しかり午後の光はここに集る

義父の里栃木県産の乾瓢を土産店で買ふ大き袋

片側に吹き寄せられし落葉たち車に吹かれ静かにうごく

あけがたの月はまんまる目の前に思はず息のむ美と云ふものに

入場券に日付を入れて栞にすこの頃おぼえり小さなよろこび

遅れしか先ばりしか明けがたの空を一羽まっすぐにゆく

風吹くを目安にしてるし棕櫚の木は切られて晩秋あきの空広びると

小春日の暖かさのこし今日の陽は西へ消えて晩秋は闇

安うりの売場に立ちて欲しきもの思ふもやがてあきらめて去る  
ボランティアで語りし貴女とも逝き十二月来れば十三年憶ひ新たに  
陽の沈む西空の雲金色にふちとりされて姿かへゆく

道の辺の雑草くさはプランターに生きいきとレストランで客のわれらを迎ふ  
一本の細き木たよりに蔦のびて未だ青きからすうり見ゆ

忘れられた風鈴は戸の開け閉めに小さくひびき存在しめす

澄みわたる大空に想ふ廃線となりし踏切りの音の響に

かさなつて又かさなつてかさなつて公孫樹の落ち葉の道の輝き

地にはりつき生きてゐる草その芯に初雪小さくたまりて光る

みつめるる吾を無視して春風に誘はれ雲のゆくさきは何処

半月の光り淡々射す庭の梅の蕾は白々と見ゆ

霜柱ひかりザツクと潰れる音のしてわづかな陽光の陰に足跡

馳走する露の臺のてんぷらに春の味ねと共に笑みつつ

あのあたり太陽の位置か垂れこめし雲を明るく今日から弥生

阿部正路論（第九十一回）

阿部正路論

須藤 宏明

―ネズミの姿と、結社の姿―

阿部正路が説く文学の魅力の一つに、二律背反という要素がある。阿部はアンビバレントと記すこともあり、同時矛盾平行という意味で使うこともある。文学が自然科学と最も違うのは、数式で整理できない、この二律背反を有している点である。文学は言葉の論理、ロジックを駆使して、人間の本質を探究するものであるが、辿り着く所には二律背反が待ち受けている。もどかしいこと限りない営為であるのだが、これが文学の魅力でもある。同時に、人間そのものの魅力である。ロマン主義とは、二律背反に基づいているのだ。徹底した孤立と人間に対する深い愛情が、叛逆を生み出すという二律背反行為が、典型的なロマン主義である。それゆえ、阿部はロマン主義に拘泥し、深淵なる研究を重ねたのである。人間は矛盾した二律背反を有しているから限らない魅力があるというのが、阿部の人間観であり、文学観である。

このことが端的に示された文章が、開高健の『パニック』という小説に対しての評言である。

開高健の文学をつらぬく人間観も、結局のところ嫌悪のために吐気をもよおす一方で、人間のいじらしさにうたれて涙をにじませてしまうという二律背反の中にあるのではなかるうか。そしてそれが、開高健のかけがえのない魅力となっているというふうには私は考える。（『戦後文学論』（昭和四十九年・桜楓社）153頁）

開高の『パニック』が描く二律背反は、ネズミは一匹ではたわいのない無力な存在だが、集団をなすと巨大な狂的で発作的エネルギーを持つ点にあると、阿部は読み解き、

つまり、ここでは、個と群れの問題が、いいかえれば、人間と組織の問題が追求されているのである。

と指摘する。このネズミの姿は、まさに人間そのものの姿である。それは、あたかも、短歌結社の姿でもある。一人で歌を作っても発表の場所なければ、おろおろと不安感に悩まされる。そこで、結社なる集団を作って発表し、お互いに切磋琢磨し、歌の力・エネルギーを発する。が、とすれば、集団の規律に自己を失い、最悪は『パニック』のネズミのように集団で海につき進み溺れ死んでしまうかもしれない。結社はこのような危険性を有している。『パニック』の、このネズミの姿に対し、

規律のなんという見事さ、規律のなんという残酷さ。

と、阿部は言う。しかし、阿部は、否定はしていない。なぜなら、この「見事」と「残酷」があい持つ二律背反こそ、人間の魅力だからである。結社という文学集団は、人間の神髄に潜む二律背反の、愛すべき姿なのかもしれない。ただし、これには、相当な覚悟が必要である。

# 歌誌散見 第六十七回

豊泉 豪

## 「ひのくに」③

前号に続き、「ひのくに」の二〇〇九年二月号より、短歌作品を鑑賞する。

・割り込みを見ぬふりをする明日には良き客となる人かも知れず  
吉岡 正孝

異議を唱えるべき不正に遭って見て見ぬふりをするのは、卑怯であるとされ、ふつう歌になるような素材ではないが、ここではそんな自分を正直に表白することで、共感を呼ぶ作になった。作者は個人経営の商店主だろうか。明日には上等の客になるかもしれない人と、うっかり喧嘩するわけにはいかないのがある。優しさや狡さ、遅しさと弱さ、おかしさと哀しさなど、一通りではない庶民の生活のありさまが背景にある。私たちは実にそのようにして、何とか生きていく。

・見遙かすほこてん銀座伊東屋の赤く大きなゼムピン目指す  
梅埜 秀子

銀座伊東屋は文房具の老舗である。ゼムピンは紙がバラバラにならないよう、仮留めをする簡易的なクリップのことで、シンボルとして伊東屋の看板になっている。銀座の大好きな店を指して行く時の、心踊る軽やかな気持ちだが、第二句から第三句のリズムによく表れている。固有名詞を知らないと思わえな

い作かも知れないが、文具が好きで、この店を訪れたことのある人の多くには共感されるであろう。

・夫が指の名残とどむる革手袋をまた仕舞ひ置く子らには言はず  
近藤千鶴子

在りし日の夫の肉体の一部である指、それを直接想起させる革の手袋。遺愛品というよりは分身のような感覚であろうか。それを一度出してまた仕舞っておく、というのだが、その行為を子どもらに内緒にする心情は、単なるテレといったものではないだろう。わが子ではあっても、あるいはそうであればこそ、共有することのできない感情や思いがある。妻である自分しか知らない故人との触れ合いや交流。亡き夫への哀惜の念が、結局によって痛切に伝わってくる。

・ごめんねと命得ざりし子へ詫ぶる妻の背を打つみちのくの雨  
山野 吾郎

「生れぬまま命落としし子へまわす汝が風ぐるま雨に首振る」に続く、恐山での作である。かつて流産してしまつた子に対して、「ごめんね」と詫び、語りかける妻。恐らく男親からは決して出てこない言葉であろう。父親たる作者は、冷たい雨に打たれる妻の背を、ただそっと見守るしかないのである。母親という存在の荘厳さに打たれる思いがする。

「ひのくに」は、平成二〇年度全国優良歌誌として、日本短歌雑誌連盟より表彰を受けた。地方誌として稀有な長い歴史を重ねつつ、さらに開かれた運営を続けていることに対する評価であった。

（「ひのくに」の項、了）

## 三月批評（作品Ⅰ）

月田 藤枝

・臘梅に月光の穂先降りそそぐ山下清の絵を見たる今日

松本 啓子

臘梅の花びらは薄くすき透る様なうす黄色、山下清の絵の緻密さと香り高い臘梅とを重ねて觀賞される作者の感性に心魅かれた作品です。

・「次の列車来るまでどうぞ」と駅長さんストーブ赤々燃し  
れくれぬ  
宮島マツエ

駅長さんの温かいもてなしに作者の心も和いだことと思いません。靈驗あらたかと聞く熊野本宮へのきびしい路を歩かれたのですか、お疲れの体も人の温かさにつつまれて意義ある旅になられたことと思ひます。

・大草原瞳凝らせばポツポツと民族衣装の小さき人影  
宮原喜美子

アンデス高原をのぞむ大草原より民族衣装の人達の歩むのが小さく見ゆると、歴史あるペルーの代表的な遺跡で世界文化遺産のマチュピチュを生る眼で見てこられ、広漠な地を旅してこられた作者の感動が伝わって参ります。

・画家として独り生きゆく汝の髪に絵の具の匂ひ沁みてただよふ  
山田 紀子

銀座の画廊に旧友の絵の展覧会に行かれた作者の友情がとても爽やか、シーパンの友が髪に絵の具の匂ひをただよわせ乍らの接待、阿部先生は無名のものの中にこそ真実良いもの

が在ると在りし日のお言葉通り素的な展覧会だったと想像出来ず。触るれば鎖骨折れそうな、前歌具像も在って可。

・仕舞湯に浮く柚子の実の四つ五つ手繰りて静か丸き音する  
山名 恒子

結句が素晴らしい一日の疲れを柚子の香りと丸々とした感触を楽しみ乍ら今日を思ひ明日の心準備なども重ねて仕舞湯にひと時を楽しむ主婦の至福の時間とおもう。

・認知症進みし母の遠ざかる目付き顔つき気品ほの見ゆ  
生稲 進

一日一日純真な子供心に還ってゆかれるお母様生来の氣質を保ちしままの気品を漂はせて美しく老いを重ねて行かれる。作者の優しくかなしい目が感じられます。

・斯くあれと念ひながらに叶ひしや三万いく日の生命尊し  
川村 貴美

健康で長命を希ふ誰しもひた願ふことである叶へられた三万幾日の命の尊さを実感された作者、未だ未だお若く今年も新年には霧が峰にスキーに出かけられた御様子心より喝采を贈り度い、そしてあやかり度いもの。

・聴診器手の中に温めみてくれし主治医の言葉わが身に沁みる  
近藤 リイ

心温かい主治医を持たれた作者はとても倅せ。良き医師良き患者の関係はどれ程大切なことか、私も身に沁みて感じているひとつ、健康で長命、七番歌とも相合せていよいよ大切なこれからの日々を過ぎて参りましょう。

## 三月批評（作品Ⅱ）

森田 勝昭

・水底みなぞこに枯れ葉静けし去りゆかむ秋を沈めてせせらぎ流る  
・季きを謳うたひ燃え尽きし枯れ葉散る中を箱根の森のせせらぎ流る

佐伯 朋子

日本の自然、燃える紅葉とその後の秋のはかなさをしっかりと見つめ、それをこの二つの歌は共に「せせらぎ流る」という表現で重さだけでなくリズム感をもって次の季節へのバトタッチをも感じさせていて、落ちつきたい歌だと思いません。

・雑駁ざつがくになりし机上に置く柚子のとどこほるもの私はむ香り

庄司 久恵

私の机の上もこの歌の頭の部分と同じ環境で、私の場合はお出来るだけ花を置くようにしていますが、「柚子の香り」とは更に深みのある清潔感を伴った歌だと感心しました。柚子の香がとどこほるものを払うという発想と感性は深く鋭いと思います。

・吃水線くつすいせんふかく蜆かきを採る舟に朝の光の揺らめきやまず

末次 房江

何首かの山陰を旅した歌、歴史の深さを詠っている中で、この歌は私が毎日見ている朝ドラの爽やかさを与えてくれる歌でした。「時」を掴み取る新鮮さを感じました。

・介護できることは仕合せ受く身より夫病む友の沁みじみと言ふ

武田 節子

高齢化社会の中、共通の課題である健康については解説や講演会等がよく耳にしますがたった三十一文字で改めて「健康」が大切なんだという事を私に直接語りかけてくれ、歌って凄いな、と感じました。

・父と子のあげし大風風つよき冬天の蒼きりきりと裂く

玉川 愛子

今では少なくなった懐かしい冬の風物詩、そのお伽噺の絵のような風景を「きりきりと裂く」で現実の冬の寒さや親子で力を入れて上げている様子がしっかりと伝わりました。名歌といってよいと思います。

・このご時勢息子の職場が気にかかる「残業無いけど大丈夫だよ」と

辻本わか子

子供を持つ家庭では多くの人が感じているこの百年に一度の大恐慌の予感、それをこの歌の会話だけを通してでもしっかりと伝わって、更に深い不安まで伝わってきます。

・老いてゆく夢の記憶が重なった古い写真をしまう抽斗

原田 寛

原田同人の歌は毎号深くて哲学的な感じが多く、私の「批評」のレベルではないのですが、この歌は人生の色々な場面が思える、しかもはっきり意思を示した歌で親しみを覚ええました。難解歌は得てしてひとりよがりになり勝ちですが、この歌はそれは避けられています。

# 合評

## 座談会

**E** 合評に入ります。今回は三月号から四首を選んで行きます。最初は富永道子会員の

夕ぐれの川に写りし鳥影を探して空の深きにまよふです。いかがですか。

**Q** 夕暮れどきの川辺の風景と心情がよく表出されています。適切な美しい言葉で詠み、心に沁みます。「鳥かげを探す」「空の深きにまよふ」は作者の生きる姿勢、心の深さが表れているようで感銘を受けました。

**H** 川面に映った鳥を見て詠んでいて、その素材の取り方が上手いです。鳥は何処だろうか、と空を探している作者の姿を讀者に想像させて、作歌の根本をよく捉えて詠っていると感心しました。視点を地上から空へ移して行って、ただ事実を述べているだけではなくて、結句も良いです。歌歴のある作者と思われますね。

**B** 夕方の渾然たる融合、空と川とが一つになった世界、そういう中で、鳥影を探すというのは、作者の追い求めているもの。それが見つかからない。結句の「深き」は主体があって、自分自身が直接に関わっていく思いなんですよね。「深き」と名詞にしなかったのがよい。秀歌ですね。

**G** 「写り」は「映り」にした方がよい。実際の空では無く、川の中の空だということ。池に映った空を見ると、空は深いなあと思ったことがある。よくわかりますね。

**E** では、次は杉本和子会員の  
限られし時間の中で今日はこれ明日はあれとて思いは巡る  
です。如何でしょうか。

**H** そうです、そうです。その通りという感じですね。

**B** 限られた時間というのは、人間に与えられた宿命でしょう。これはどうすることも出来ない。だからこそ、人間は今日は、明日は、と思いつ巡らしながら生きているわけで、時間の重さと同時に、人生の苦しさを実感する。藤村の「千曲川旅情の詩」に「今日もまたかくてありなむこの命なをあくせく明日をのみ思ひわづらふ」とある。こういう世界がこの歌のどこかにあると良いですね。「思いは巡る」で終わってしまっているのが物足りない。結句を変えたいね。

**Q** 夜になってでしょうか。今日はこんな事があったと反省したり明日の予定を思い浮かべたり、一日一日の限られた時間を大切に生きている喜びを感じ、味わいのある歌と思えましたね。

**G** 家族のために今日はこれ、明日はあれと思いつ巡らしている充足感が出ている。ただ、「限られた時間」という意味が人生の時間なのか、与えられた仕事の勤務時間なのか、はっきりしない。「思い」の内容を具体的に詠めばリアリティも出てくるし、説得力も出てくる。

**B** 初句も、結句も工夫できるね。

**G** それから、文語表現で旧かなの場合は「思い」は「思ひ」にするべきと思う。「限られし」も文語だから、一首の中で、文語と口語、旧かなと新かなを混合して使わないこと。これは作歌の基本的なルールです。

E では深谷充代会員の

白き花あまた咲かせて山茶花のひそと華やぐ路地の片隅に移ります。如何でしょうか。

H 山茶花は晩秋を知らせる実直な、地味な花ですよ。それを「華やぐ」と見たのは、作者の感性でしょうね。

Q 路地の片隅にひっそりと咲く山茶花の白い花の華やぎを見つけた喜び、静かな優しさの溢れた歌で、作者も山茶花のような静かな方なのでしょう。

G 「ひそ」と「路地の片隅」とが重なっているようだ。「ひそ」として「華やぐ」だけでよいと思う。

B 情景を上手く表現している。ただ、「ひそ」と「華やぐ」とが、どうも表現としてはミス・マッチのような気がする。

E Hさんもミス・マッチだと思いますか。

H ミス・マッチと言えませんが、地味さを上手く表現しているな、と思いましたね。なんとなく味しさも出ています。

B 私はミス・マッチだと思うが、案外「ひそ」と「片隅」の間の「華やぐ」が生きている気もしています。

Q 山茶花の花がお好きな方で、感動したのではないでしょう。華やいでいても山茶花はひっそりしていますよね。

G 「ひそ」として、作者の「華やぐ路地の片隅」は認めても良いと思う。

B 私達の解釈としては、「華やぐ」を中心とした「ひそ」と「片隅」を認めようということですね。

E 最後は、四首目で、尾上貴子会員の

ほうじ茶の香り漂うリビングにアロマセラピー憩うひとときをとりあげます。どなたからでも。

H アロマは芳香、セラピーは治療という意味ですね。それが、ほうじ茶だという。口語短歌、現代短歌の極をいっている、と思いましたね。

Q 「リビング」「アロマセラピー」と日常語になった外国語を使い、ほうじ茶の香ばしいかおりに癒されている一刻、心身の疲れがほぐれてゆく、健康的で明るい家庭、全てに感謝して生活しておられる様子が感じられる現代的な歌ですね。

B 「アロマセラピー」を使っているので、「香り漂う」はいらない。「ほうじ茶のアロマセラピー」と言えば分かりやすい。「リビング」は場所だからそのまま良い。

Q 昔から、お香を嗅ぐということもありましたね。「香道」では「嗅ぐ」ことを「聞く」というとか。

B アロマセラピーで使うのは、ハーブが多いですね。「ほうじ茶」はどうなのでしょう。

G 「ほうじ茶」は諧謔的で面白い。安上がりでね。重なっている言葉は出来るだけ省いて、世界を広げて作歌をしたほうが良い。

E 結句の「憩うひととき」はどうでしょうか。生活の歌はとかくこういう風になり易いのですが。

G 平凡だと思う。私なら、「心を放つ」にする。

B 確かに下句は平凡だと思います。ただどう直すかは作者にまかせましょう。

E 本日はありがとうございます。

(記録・山田紀子)

選者十首 (3月号より)

選者 岩橋千代子

人生の中くらいにて今年ゆく普通のようにで宝船なり

宮島マツエ

☆雪もなく氷雨が静かに軒濡らす砂利の小道に春は隠れて

森 五貴雄

戦後の法みな核家族に分裂すまるで打上げ花火のやうに

相羽 照代

丁寧<sup>に</sup>心の曇り拭くごとく鏡を磨く大つごもり<sup>に</sup>

上田やい子

☆生き継ぎて三万いく日数へつつ小さき氣負ひ芽生ふ新年

川村 貴美

麻酔より覚めて返事をしたるとふ記憶なき吾に不思議な時

間 塩田 秋子

身を緊めて凌ぐ夜に来る静寂は冬野にひとりの写真のごと

し 庄司 久恵

☆父と子のあげし大風風つよき冬天の蒼きりきりと裂く

玉川 愛子

月までもあと少しよと加勢する凧たこあがれ正月三日

照山 好子

明日からは明日からはといひ生きてこし此のはかなさの山

崩れたり 二反田 實

選者 武田 節子

☆手術室に入りし夫を待つ椅子に位置定まらぬわが身委ねる

松木 昭子

☆雪もなく氷雨静かに軒濡らす砂利の小道に春は隠れて

森 五貴雄

あかあかと明日を約して沈む陽の巨き力に包まれてたつ

山田 玲子

認知症進みし母の遠ざかる目付き顔付き氣品ほの見ゆ

生稲 進

眞澄たる空幾万の未来秘め茜に染まり初春の明く

石塚 立子

峠路の山に落葉の深く積み野仏埋む胸あたりまで

井上萬里子

☆生き継ぎて三万いく日数へつつ小さき氣負ひ芽生ふ新年

川村 貴美

風冷ゆる山辺の白き冬桜煙のやうにほのとひそけし

木村百合子

せせらぎの響ける森に木洩れ陽の水の面染しむ水澄ましを

り 佐伯 朋子

いつまでも遺影の兄は生真面目に笑みを絶やさず我ら見守

る 松岡 三夫

選者十首 (3月号より)

選者 森本 元昭

戦時下の便り出て来ぬ脇付に平安と書く父の筆跡

松本 啓子

この年も十人のうから揃ひたり屠蘇を酌む手に朝光の射す

宮井 富美

プランターにやうやく芽生えし小松菜の間引くは愛しき小

さないのち

山田 玲子

枯れ枯れの朝庭に立ち臘梅の香をさらひ来し風深く吸ふ

山名 恒子

死に生きに幾度あひしや小児科医の娘は佛にみゆることあ

り

相羽 照代

水底みなぞこに枯れ葉静けし去りゆかむ秋を沈めてせせらぎ流る

佐伯 朋子

神つどふ出雲に白き雲ながれ空ふかぶかと干木やしほたつ社

末次 房江

介護施設のホールに聖夜の灯のともり病む人の傷みしらずか

玉川 愛子

都去り大路の道はやせ細り夏草の下石仏のみゆ

角田 順子

十年も生きられないと言われしも五十八年を生きぬいた君

土方 澄江

選者 上田やい子

☆手術室に入りし夫を待つ椅子に位置定まらぬわが身委ねる

松本 昭子

噛まずして消化酵素もいらぬ程刻みし夫のキャベツ納豆

村田 孝子

果てしなく越後平野の白き闇喘ぐごとくに夜行車走る

湯本 いと

雨降りの街には鉄の匂いして看板たちのひしめきを聴く

熊谷 香織

☆生き継ぎて三万いく日数へつつ小さき気負ひ芽生ふ新年

川村 貴美

三十年同じ髪型変へてみむ鏡の中の老い悲しみて

杉山 榮子

椎の実はぼんぼろひさしにはずみおり 放たれ笑う子らの

高橋 和子

ごとくに 介護できることは仕合せ受く身より夫病む友の沁みじみと

言ふ 武田 節子

☆父と子のあげし大風風つよき冬天の蒼きりきりと裂く

玉川 愛子

海峡を渡るバスより見あぐれば空の碧きを鷹ひとつ舞ふ

松岡 三夫

病む夫とひと日拘りおそき湯に老々介護を自らに問ふ

月田 藤枝

拔芳歌は「残り世を生く」と題する巻頭二十五首詠の冒頭に在る歌。この巻頭二十五首の主題となっている。夫君は大正九年十月二十八日生まれ。現在満八十八歳。米寿、家族からそして国家から、その長寿を祝福されて生きるべきである。自家の作業場で黙々と精密機器を製造し、戦後の日本の高度成長期を支えて来た。その夫君を支えて作者は六十年を経た。金よりも硬く高価なダイヤモンド婚のそれも又祝福されるべき人生の慶事であるはずだ。しかし、夫君には痴呆の症状が出、介護は作者の専従となった。子供達は家の中をバリアフリーにし、米寿を祝い、週に何度か尋ねて来てくれる。それが精一杯。そんな状況の中で真に支えなければならぬ国家の制度が貧弱で、しかも年々細って行く。政府は今選挙を前にして単年度限りのバラマキ予算で国民の機嫌を取っているが、この国の政治の貧困はもはや限界を越えた。それでも国民は忍の一字。かくして老々介護は益々増加し苦しみは深くなる。しかし作者は歌を詠み、歌友や家族に支えられ豊かに生きようとする。その作者の心根の美しさは掉尾の二首に集約され「吾がめぐりの温き言葉にはげまされ今日もおだやかに夫とのひと日」「哀しみをうつ

ろに耐ふる夫と手を携へて二人残り世を生く」頑張れと心より声援を送る。

子や孫の笑顔賑はひ家に満つ二人婆々の初春に老いな  
し  
山本 賀子

今年の正月は「一人婆々」とその孫や子が集まった賑やかな正月だったと言う、所謂四世代が一堂に会したと言う事。私の長女の嫁ぎ先も四世代、私の妻の実家も四世代。まるで長寿が悪の様な風潮になって来た今だからこそ、四世代が一堂に会して睦み合う事の意味と大切さを声高に言い続けなければならぬ。その為には「老い」にもっと一人一人が自信を持たねばならない。その意味で結句の「初春に老いなし」が生き生きと輝いている。

食卓の孫の忘れしゲーム機と七草粥を妻も啜りぬ

吉田 昌夫

正月も七日過ぎて、子や孫の去った静寂の食卓にポツンと孫の使っていたゲーム機が置き忘れて置かれている。しかし作者も妻もそのゲーム機を片付けようとはしない。その事が子や孫の去った老夫婦の虚脱感を表現して物悲しい。核家族化の進んだ社会では、三世帯、四世帯の同居は難しい。そして七草粥。「妻も啜りぬ」の「も」の使い方が絶妙。一種言い知れぬ夫婦の心の通い合いが見事に表現された。

旅立ちに羽を広ぐる候鳥の迷ひ知らざれば闇深く飛ぶ

# 前々号 (291号) 秀歌抜芳

石塚 立子

「候鳥」とは渡り鳥の事。渡り鳥は季節が変わると北へ飛び立って行くのは定め。その事に何の迷いも持たない。井伏鱒二の「尾根の上のサワン」は羽根を切られ、人に飼われても尚候鳥の習性を忘れない雁の姿を描く。この作品の舞台は印旛沼と手賀沼だと言われている。あるいは作者が見た場所もそのあたりか。結句「闇深く飛ぶ」は難解だが、迷いを知らぬ者に待つ闇、その闇を飛んでこそ知る世界がある。そのためらいと勇気を候鳥の旅立ちに見たのであろう。

日本中晴れといふ今日爆音の響きては去る吾が町の空

江面 伸子

「日本中晴れ」それは昭和二十年八月十五日。いまわしい戦争の終った日。それから六十余年、今日も日本中晴れであると言う。そんな過去の思い出を甦らせる様に次々と爆音を響かせて自衛隊機が飛ぶ。国を守るとはどういう事なのであろうか。今自国を攻撃された事の無い国が他国で戦争をしている。しみじみ人を殺す兵器の無惨さを思う。世界中から兵器を無くす事は永遠に無理なのであろうか。

ゆらゆらと揺るる日差しを置き去りに流れゆく川の光  
眼に追ふ

込山 千代

太陽の光はゆらゆらと揺れながら、川の同じ所

を照らしている。しかし川は常に流れそこに留まる事は無い。鴨長明は「方丈記」の中で人生を川の流れに喩え、「ゆく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし、世の中にある人とすみかとまたかくのごとし」と記した。抜芳歌、そんな川の流れ行く様に残照を追いついて見る。見事な感性だ。

聴診器手の中に温めてみくれし主治医の言葉わが身にしみぬ

近藤 リイ

冬、聴診器の金属部分は冷たい。直に素肌に当てるものだからこそ、主治医は手の中に温めて当ててくれた。そのやさしさが作者の心を打つ。人は言葉にしないやさしさを感じ取った時深く感動する。だからこそその後の言葉が深く胸に沁みる。心が行動に表われ、行動を言葉が補完する。最も人と人とが信じ合える瞬間。今作者はそんな瞬間に遭遇し歌も又豊かになった。

十五夜をめづる唐詩満つる待つ大和心の十三夜の月

酒向 一次

「唐詩」は漢詩。阿倍仲麻呂の和歌「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」が現在西安市興慶宮公園の記念碑に五言絶句の漢詩となって刻まれている。あるいは別の詩か。十五夜は中国から伝わった行事であるのに対し、

十三夜月は、日本の宮中で生れた行事。宇多天皇が九月十三夜の月を愛で「無双」と賞したのが始まりとも言われている。作者はそんな事全てを心に納めて十三夜の月を詠んだ。

この国のとほ世がたりに八重垣の妻籠みやさし八雲たつ里  
末次 房江

「八雲立つ出雲八重垣妻込みに八重垣作る其の八重垣を」須佐之男命の歌とされ、短歌の起源を示すものだと言われている。この歌には阿部先生の詳しい評もある。「八雲たつ里」とは「八重垣神社」のあるあたり。私も行った事があるが、すぐ私の側に稲田姫や須佐之男命が立っている様に見事。正に抜芳歌の通り。八重垣神社の雰囲気象徴、「連理の椿」がある。

トネルを抜けるとそこは雪国のぼたん雪舞白一色の世界  
杉山 直子

川畑康成の「雪国」の書き出し、「国境の長いトネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」はあまりにも有名。この時のトネルは清水トネル。自動車で行けば関越トネル。私は湯沢へよくスキーに行ったので、いつも関越トネルを抜けてその白い風景に感動した。結句「白一色の世界」は少し物足りない様にも思うが、真実これしか表現出来ないという場合もあるのだ

と実感する。

先生のひなみただねぼくたちは叫びてさらは吾を取り巻く  
高橋 和子

幸せな教員生活を送られたのだなあと、しみじみ作者がうらやましくなる。「子どもの情景」と題する七首、どれもが、子どもと先生の心の交流の暖かさに満ちていて胸を打つ。それは作者の掛替えの無い人生の宝物であり、生涯その胸に生き続ける誇り、そして喜び。特に抜芳歌、自分達を先生のひな鳥だと言って駆け寄って来る子らの姿が目に見えるようだ。

家族といふ円卓にもどる場所の無き老人よ いつかの吾かもしれず  
玉川 愛子

今の社会状況を考えた時、いつ家族という円卓が無くなるか分からない不安を全ての人が持つて生きているのではあるまいか。鴨川の福祉施設を見学に行った時、一様に老人の顔の暗かった事を思い出す。知り合いの介護士から「自分の親は施設に入れたくない」と聞いた。しかしそれはあくまで生活が許せば的前提が付く。地域社会の崩壊が悲しい。結句の持つ重さに、ただ慄然とする。

豊島 英明

級友がやけに陽気だなぜだろう薬指輪と笑顔がキラリ  
英国ハル大学に留学中の作者。正月休みで久しぶりに会った級友。クラス会か何かの会で出会っ

## 前々号 (291号) 秀歌抜芳

た級友なのであろう。結婚をした事も知らず、陽気な友の姿をいぶかしく思っていたが、その指を見て納得。結句「笑顔がキラリ」が級友の幸福な気持と、作者のやさしい心が二重写しになって見えて来る。青春の微笑ましい一コマが心を暖かくする。

歌売<sup>なりわい</sup>りて生業<sup>なりわい</sup>たてることなければことごとく弱し悲し  
き我が歌

中村 武光

私は歌人として生業う事を嫌い、あくまで素人であろうとし続けて来た。その気持は何等変わる事は無い。文学にプロも素人も無いと思うからだ。しかし、プロにはプロの厳しさがあり、プロである事の苦しさを知ろうとはしなかった。小説家の苦しさは知っているつもりだったのに。抜芳歌、そんな私の一面的な歌に賭ける気持をハンマーで打ちのめす程の衝撃があった。作者の人間の凄さを改めて知らされた思いだ。

対象を失なひしより十五年やっぱりわれは子らに生か  
さる

長須 正文

教員生活を終えて十五年。作者はその事を「対象を失った」と表現する。「対象」とは何であろうか。自らの生の根元にある生きる喜び、その喜びを与えてくれるもの、それが対象であり、それは子らであった。十五年たって尚私は子らに生かされていると述懐する作者の教員生活の充実を私

は真実うらやましく思う。それは決して懐旧の念ではない。今の生活をも支える作者の生活の、そして思考の原点なのだ。

雪つもる津軽平野に一面の列車が走る姿小さし

深谷 幸子

津軽は雪が深い。津軽は太宰治の故郷。私が津軽へ行ったのは平成八年八月六日岸田君の死を十和田湖畔で聞いて四日後。暑い盛りだった。りんごを手を伸ばせば取れる程に道端にまで生っていたのを思い出す。冬、雪は全てを消し遠近を狂わす。雪の津軽平野を走る列車を遠望した時本当に列車が小さく見えるのだと思う。まるでおとぎの国の列車のように。結句の何気無い表現が生きた。七年余聖地への旅全て終わり地球再生願いよ届かん！

藤井 武徳

作者が初めて本誌に歌を発表したのはVOL.30 No.1つまり昨年の一月号、それから十五号、「山」の歌を詠み続けた。ちなみに第一回目は北アルプス槍ヶ岳であった。聖地とは幾つあるのか私には分からない。しかしその全てを登攀したと言おう。七年の歳月を思うと心からおめでとうと言いたい。そして山、大自然にあって願う事、それは地球再生。山を愛するからこそ、地球の傷みが分かるのであろう。強く心の高揚が伝わる。

文語で短歌を詠む人のために (五)

奥田 清

(1) 四段活用

口語で五段に活用する「咲く」という動詞は、文語では次のように用いられる。

花<sup>①</sup>咲かば病癒ゆると言ひしかど<sup>②</sup> 咲きさかる園君はをらざり

さりざりとみぞれ降る夕一鉢の春を<sup>②</sup> 咲きゐる花を選びぬ  
青梅雨の仁王尊院の女坂ホタルブクロは露重く<sup>③</sup> 咲く

沢山の冬のねむりを過こしきてすももの花の<sup>④</sup> 咲く頃となる  
岩陰にタカネマンテマ秘め<sup>⑤</sup> 咲けり短き夏のぬくもり抱き

春雨に目覚めて開く桜花命短かし思ふがに<sup>⑥</sup> 咲け  
傍線①咲か(未然)、②咲き(連用)、③咲く(終止)、④咲く(連体)、⑤咲け(已然)、⑥咲け(命令)

文語動詞「咲く」は語尾が五十音図のア・イ・ウ・エの四段にわたって活用する。このような動詞を四段活用という。四段活用の動詞は、カ・ガ・サ・タ・ハ・バ・マ・ラの各行にある。例えば、泳ぐ・消す・待つ・思ふ・呼ぶ・読む・取る。などであるが、後述する「ナ変・ラ変」を除いて、動詞の未然形に「ず」をつけて、ア段につくものは四段活用である。「咲かアらず」声をひびかせるとわかる。「<sup>①</sup>這ふやうに<sup>②</sup>打つ畑の霜<sup>③</sup>ひかり秩父傾りは春を<sup>④</sup>待ちゐる」の傍線①這ふ、ハ

行四段・連体形。②打つ、夕行四段・連体形。③ひかり、ラ行四段・終止形。④待ち、夕行四段・連用形である。各自で、適当な例歌(他作・自作)を選び、四段活用の動詞を拾って、習熟してください。

(2) ナ行変格活用(ナ変)

口語でナ行五段に活用する「死ぬ」という動詞は、文語では、次のように用いられる。

韓にしていかにか<sup>①</sup> 死なむ。われ死なば、をのこの歌ぞ、また廢れなむ。(与謝野鉄幹)

子のために<sup>②</sup> 死にし母見ゆ馬小屋の一筋の長き古繩の果て(阿部正路)

我どちにかかはりもなきたたかひを 悔いなければ、  
子はそこに<sup>③</sup> 死ぬ(釈 超空)

深溝におちいりて<sup>④</sup> 死ぬる小さき馬たてかみ燃えし面を空に向けて(窪田空穂)

多くの人<sup>⑤</sup> 死ぬれば……(宇津保物語)

国のため往ぬ<sup>⑥</sup> 死ねナ変日常の会話なりけり兄らの青春は  
傍線①死な(未然)、②死に(連用)、③死ぬ(終止)、④死ぬる(連体)、⑤死ぬれ(已然)、⑥死ね(命令)

文語動詞「死ぬ」は語尾が五十音図のア・イ・ウ・エの四段にわたって活用しているが、連体形に「る」、已然形に「れ」を伴う。このような動詞をナ行変格活用(ナ変)という。ナ変には、「死ぬ」「往ぬ」の二語しかない。

# 作歌の目・作歌の技法(第五十二回)

## 哲学をする短歌(四)

三木 勝

兼好は、徒然草の三八段で次のように言っている。

「伝へて聞き学びて知るは、まことの智にあらざ。いかなるをか智と言ふべき。可・不可は一条なり。いかなるをか善といふ。」

「(・・・) 迷ひの心もちて名利の要を求むるに、かくのごとし。万事は皆非なり。言ふにたらず。願ふにたらず。」

右の言葉は、歌人兼好が歌を作るなかで日々感じ、歌を作れば作るほどに、ますますその思いが深まっていく、兼好自身のかなかの心の叫びであったのであろう。歌人兼好が書いた徒然草を歌人の書として読むとき、歌人が歌を読むことによって常日頃思い浮かんでくる疑問・疑念が、列記され、そのことへの考察がなされている事が分かる。歌人の心の叫び・苦悩の書として読み返してみると、徒然草は歌を作る者が歌を作るが故に出会う苦悩を乗り越えようとした者の心の航跡の書であることが分かる。この意味において徒然草は、確固とした歌論書と言えるであろう。徒然草を書くことによって兼好は、何かを得心し、自信を持って、再び歌の世界に帰っていくことが出来たのであろう。

兼好が帰っていった歌の世界とは、どのような世界といふべきであろうか。哲学者西田幾多郎が捉えた歌の世界を見て

みよう。『短歌について』という『アララギ』(二十五周年特別記念号・昭和八年一月号・第十三卷)への寄稿文で西田は次のように述べている。

「短詩の形式によって人生を表現するということは、単に人生を短詩の形式によって表現するということはでなく、人生には唯、短詩の形式によってのみ掴み得る人生の意義というものがあることを意味するのである。短詩の形式によって人生を掴むということは、人生を現在の中心から掴むということとでなければならぬ、刹那の一点から見るということとでなければならぬ。人生は固より一つである。しかし具体的にして動き行く人生は、これを環境から見るということと、これを飛躍的生命の尖端から掴むということは同一でない。そのいづれより見るかによって、人生は異なった観を呈し、われわれは異なった意義において生きるといふこととなるのである。」(注1)

西田が言っているところの短歌によって「人生を現在の中心から掴む」、人生を「飛躍的生命の尖端から掴む」ということは、過去も未来も意識しない一瞬において存在のすべてを捉えるということである。一瞬がすべてであり、一瞬は現在であり、現在がすべてである。これが「人生を現在の中心から掴む」、人生を「飛躍的生命の尖端から掴む」ということである。短歌を読むことの提要はここにある。人生を「環境から見るといふこと」は、一瞬においても絶えず過去と未来を意識し、現在を過去と未来の関係の中で絶えず捉えていくということである。この意識は論理的となり、科学・学問

の基礎を成す。学問・科学はここから生まれて来る。

兼好は徒然草という散文において、現在から過去も未来も見ようとしたり。あるいは過去や未来から現在を見ようとしたり。つまり「環境から」人生を「見る」ことを試みたのである。短歌という技法では、決して把握できない世界を、散文の技法によって把握しようとした。過去・現在・未来を意識の中に取り込み、その視点を持って人間の存在の環境を、散文の技法を用いて考察した。歌読み人の、歌読むが故に生じる孤独の道を、彼は散文を用いて、もう一度歩んだ。その結果、彼は「人生には唯、短詩の形式によってのみ掴み得る人生の意義というものがあることを」得心したのではなからうか。それは過去と未来の意識を持たず、「今||こ」（注2）にいうことの安心と充足を歌を読むことによって得ることが出来る<sup>と得心したのではなからうか。</sup>。徒然草は仏の話して閉じている。

『その教へはじめ候ひける第一の仏は、いかなる仏にか候ひける』と言ふ時、父、『空よりやふりけん、土よりやわきけん』<sup>と言ひて、笑ふ。</sup>

「第一の仏」を問うことは、キリスト教・イスラム教の世界を礎とする西洋哲学の論理で行くならば、運動の第一原理・運動の始めの基となるものは、何かを問うことである。キリスト教・イスラム教の世界に基づく西洋哲学では、この運動の第一原理を神とする。宇宙の運動のすべては、神から流れ出る。物質の運動も法律の力も人の心の動きも、運動の第一原理によって、運動の原理は与えられ、その運動は完成

に向かつて展開してゆく。完成は、世界の完成であり、歴史の終わりである。歴史にははじめがあり、終わりがある。歴史にははじめがあって終わりがあり、これでひとつの全体をなす。すべての運動は、この全体の部分である。部分は全体から各部分の存在機能と存在意義が付与される。人間もこの部分であり、この全体から己の存在機能と存在意義を知り、安心立命するのである。

一方、「第一の仏」を問うた兼好は、西洋哲学流の運動の第一原理に到達することはなかった。むしろ父の『空よりやふりけん、土よりやわきけん』の言葉に安住したのである。全体が分からなくても大きな存在の部分であることは分かる。大きな存在の中の部分であることに安心立命する境地に到達できたので、兼好はここで徒然草を擱筆したのではなからうか。つまり兼好は「人生には唯、短詩の形式によってのみ掴み得る人生の意義というものがある」ことを徒然草の執筆を通して得心したのである。換言すれば、散文では捉えきれない側面が人生にはあり、歌はその側面を旅する機能を持っていることに得心したのではなからうか。散文では表わせない、しかも重要である世界を作歌によって探求出来る<sup>と兼好は得心したのではなからうか。</sup>

（注1）『西田幾多郎随筆集』岩波文庫 青一二四・七  
二二二頁〜二二三頁。（注2）加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店2007年 四頁。

# 歌帖余白（六十五） — 編集雜記 —

松岡三夫

渠（かれ）は歩き出した。銃が重い、背囊が重い、脚が重い、アルミニウム製の金腕が腰の剣に当ってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびたたく刺戟するので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭になってしまった。

で始まる『一兵卒』を書いた田山花袋は、一九三〇年（昭和五年）五月十三日に没した自然主義派の小説家。群馬県館林（当時は栃木県）に一八七二年一月二十二日出生。本名は録也。十二歳から漢学塾で漢詩文を学び、十四歳で漢詩集を編みます。また桂園派の和歌や西洋文学にも親しむ。一八九〇年に兄に従い上京し、翌年尾崎紅葉に入門、その指示で江見水蔭のもとで修業したが、のちに国木田独歩、柳田国男らと交友。『蒲団』『田舎教師』『妻』などの作品を発表し、自然主義派の代表作家のひとつとなります。紀行文にも優れたものがあります。

『一兵卒』は中ほどで

軍隊生活の束縛ほど残酷なものはないと突然思った。この病、この脚氣、この病は治ったにしても戦場は大いなる牢獄である。いかにもがいても焦っても、この大いなる牢獄から脱することはできない。

と、軍隊生活の残酷さについて述べます。一九〇四年（明治三十七年）、日露戦争では第2軍写真班として従軍し、その記録を公表します。『一兵卒』はその体験を小説化したもの。かなり反戦的な作品。

このころから自然主義文学の分野に目覚め、評論『露骨なる描写』や小説『少女病』を発表し、新しい文学の担い手として活躍することになります。

『生』の執筆当時を回想して、花袋は「兄も嫂もまだ生きていたので、それに対する解剖にも気がひけた。そういうふうに思っていたのかと思われるのも恥ずかしかった。殊に死んだ母親に対する忌憚なき解剖が中でも一番私を苦しめた。母親に無限の同情を持ち、又無限の涙をそそいだ私だけに、一層辛かった。モウパッサンの所謂「皮剥の苦痛」——そういうものを細かに私は味わせられた」と自ら語ります。この「皮剥の苦痛」は『小説新論』の中にも『卓上語』の中にも引用されています。この語に作家態度をこめるのです。

黎明に兵站部の軍医が来た。けれどもその一時間前に、渠は死んでいた。一番の汽車が開路開路のかけ声とともに、鞍山站に向かって発車したころは、その残月が薄く白けて淋しく空にかかっていた。しばらくして砲声が盛んに聞こえた。九月一日の遼陽攻撃は始まった。

と小説は終るのです。うつくしきもみぢのいろも有ながらなどかくあきはさびしがるらん

録弥（花袋）

# 洗足池畔吟行会報告

庄司 久恵

平成二十一年三月三十日(月) 大田区の洗足池畔に於て太陽の舟春の吟行会を開催した。十二時より四時半まで。

十二時に洗足池駅に集合、出席者二十八名。一時間洗足池畔を散策し吟詠、一時に洗足風致会館会場で詠草を締め切った。

## 吟行詠草

「イチロー」のセンター安打の一刹那 江戸救ひたる「勝」と異なるも 松本 啓子

田村さんを偲びて巡りしや四年前洗足池畔あの日を語る

土屋 道子

はなびらの透ける翳れる陽を返す今日咲きくれし桜いとほし

山名 恒子

春浅き洗足池に恋浮かべボート漕ぎにし老の華やぎ

山岡 三夫

花咲けど洗足池の風寒し心に吟ず「獄中感有り」

吉田 幸雄

桜見むと来し洗足池柔らかき陽射し嬉しく背筋を伸ばす

井上萬里子

西行ののぞむ桜の花のころ洗足池畔を友とあゆみぬ

山田 紀子

二分咲きも桜下に眠りし海舟もときのはじまるいたみを誘ふ

庄司 久恵

咲き初むる花の下なる千束に語らひ楽し鴨の群れ

河野 静子

池の面に袈裟の松写りて富士眺め海舟ねむる洗足の池

湯本 いと

ほろほろと桜花咲く夕闇に遠き死者たち還りくるやも

川村 貴美

目覚めたる洗足池の桜咲く鴨と緋鯉が戯れ遊ぶ

森 五貴雄

再びを馳せゆくことなき青銅の奔馬池月はなにに嘯く

月田 藤枝

日蓮のけさかけ松の三代目のどけき空に新芽伸びゆく

吉岡悠紀子

うす寒き千束の花の哀れとも袈裟をやかけむさかりなりや

長島 宏

たちまちに洗足池を翡翠の水面すれすれ瑠璃の幻想

深谷 幸子

胸裡を吐露せし「獄中感有り」南洲の姿と重なる洗足の櫻

多久和玲子

細波をたたせてスワンボートゆく洗足池に春の華やぎ

長沼 温代

ほんのりと色づき初めし桜木の水面にゆらぐ洗足の池に

武田 節子

海舟も日蓮も愛<sup>め</sup>でしこの洗<sup>い</sup>足池<sup>け</sup>に花筏<sup>はなづか</sup>待つ鴨<sup>かも</sup>らもわれも

宮島マツエ

師よ見ませへ太陽の舟の友集ひ桜の下にうたを詠みつぐ

須澤 溪子

出もやらぬ洗足池の水底は暗き都会の歴史積みゆく

高崎 邦彦

コート脱ぎベンチ勧むる君なりき洗足畔<sup>ほとり</sup>の杳<sup>やう</sup>き散策

久保田昭江

風邪癒へぬ洗足池へ吟行会桜山如何に花愉しまむと

浅見 時子

なむみようほうれんげきようと唱へたる袈裟掛松に母の面影

照山 好子

空蒼し迎えるるは洗足の五分咲き桜優しき友どち

渡辺 幸子

杳<sup>やう</sup>き日の忘れ得ぬ場所またここに集ひしことの縁<sup>えん</sup>うれしき

山本 賀子

花冷えの洗足池の杭<sup>へ</sup>の上に<sup>へ</sup>あまた止まれる水鳥の影

志賀 倭子

待ちわびし春の陽さしにつつまれて樹下を歩み身の戻り戻り

北川 昭

来ぬ

二階の会場より池周辺の風景が一望され、総てのものがこの日を祝福しているように輝いていた。急ぎ歌稿を作成配り、選歌。二時近くより歌会となる。代表挨拶より始まり、松岡編集長の司会は一首一名の批評と進行は早い。代表の適切な

助言と指導。作者の発言。参加者の協力により四時過ぎに歌会を終った。最後に高崎代表より各賞の発表があり、受賞者には阿部先生の著書が授与された。

特 選 庄 司 久 恵

準 特 選 久保田 昭 江

最高点者 吉 岡 悠 紀 子

当日の吟詠による歌会は初めてだと思ふ。名残りを惜しみながら解散した。

# 歌会報告

本部歌会 3月例会(第350回) (上田記)

日時 3月14日(土) 13時～16時30分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 32名 出詠 33首

司会 原田 寛同人

荒天の中、電車の遅れなどがあり大変でしたと初めに高崎代表のねぎらいの言葉があり、続いて全国大会の日程と内容の説明がありました。

全国大会(千葉支部担当)

6月28日(日)・29日(月)

宿泊ホテル 一宮館

一宮館の庭には芥川龍之介の歌碑、成東には伊藤左千夫記念館があります。楽しみにして御参加下さい。

◎三木企画部長が敬愛大学生涯学習講座「はじめての短歌」の講師をされます。(4月～9月の予定)

太陽の舟会員二百名達成を目指したいと抱負を語りました。

◎洗足池畔吟行会についての案内とお誘いが山名事務局次長からありました。多数ご参加下さい。

原田同人の司会の元、和やかに歌会が進められました。疑問に思われた「アサギマダラ」「タナロット」の詳しい説明

のプリントが配られたり、個々の感性の広がりのある批評で歌の理解を深めました。

今月の高得点の歌は次の通りです。

・二十九画凝縮文字と見てをればゆるりとほぐしてみたくなる「鬱」 庄司 久恵

・久びさの天からの手紙牡丹雪胸に納める亡夫のことづて 志賀 倭子

渋谷支部 支部長/志賀 倭子 (武田記)

日時 3月14日(土) 10時～12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

司会 武田 節子

出席 6名 出詠 6首

春の嵐のために少し時間が遅れての支部歌会となりました。歌に対する意見としては、女性の目線と男性の目線には、感じ方に違いを感じるなどがある等の意見が出されたり、提出歌の中に3月10日の空襲を詠った一首があり、その日の空襲体験者が他にも数名居て、その時の様子や、苦しかった戦後の事などが話題になりました。

三月号の七首詠は順番で山本さん、生稲さんの歌が読み上げられ、題の付け方等いろいろな例が話し合われました。

・防空壕出るに都心の闇燃ゆる三月十日母校消失

中村 陽子

この一首について三月十日の空襲は都心ではなく下町が対象であったことや、燃え上った炎が空をおおって、まるで空

が燃えているようだった等の意見がだされ、もう少し推敲した方がよいのではないかとということで宿題となりました。(ちなみに渋谷支部では宿題になることはよく有ることです。)

**水戸支部** 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 3月8日(日) 13時～15時

場所 びよんど(男女センター)

出席 8名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

長須先生によるミニ講義は森岡貞香。先日93歳で逝去。病苦と闘いながら、「石畳」を創刊、また「白蛾」「珊瑚数珠」など多くの歌集を出した。感受性高く肉声的美学。次回はよいよ「鑑賞より実作へ」とミニ講義は続く。

・会話なき夫婦の夕餉の卓に挿す菜の花一輪はのか香りて

福地 啓子

**水戸支部** 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 3月15日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 7名 出詠 10首

司会 深谷 充代

岩間の山もいくらか春めいてきた。出席者も明るい顔で活発に発言。畑や土に関するの発言など岩間ならではの自然にひたった半日でした。また希望あふれる祝いの歌が次のように出た。このような歌も大切だと思う。

・今年このとの「太陽の舟」の水色は鮮やかな色前途洋々

**柏支部** 支部長／末次 房江 (角田記)

日時 3月13日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 7名 出詠 20首

司会 角田 順子

まだ風の冷たい弥生でした。三木先生をお迎えして、実りある勉強会が由来しました。

・少々のお酒に語る明日の日も遠き昔も星になりゆく

石塚 立子

・木れんの日増しに太る花の芽を今朝は見紛ふ枝の雀と

富永 道子

**大田支部** 支部長／庄司 久恵 (長沼記)

日時 3月23日(月) 13時～16時30分

場所 山王高齢者センター

出席 7名 出詠 7首

司会 長沼 温代

暖かい日が続いた後、この日は寒さが少々戻って来ました。歌会を始める前、吟行会を大田支部が幹事の為、打合せに一時時間半程さきました。歌会に入りそれぞれ批評しながら推敲しい、少人数ながら活発な時間を過しました。

・爪切るは生きるあかしひっそりとすべての人間の爪切る  
不思議

庄司 久恵